

かま風し

第32号

発行 地域力推進蒲田西地区委員会
編集 地域情報紙編集委員会

「ご存知ですか？」 西蒲田にあった 「内外編物」

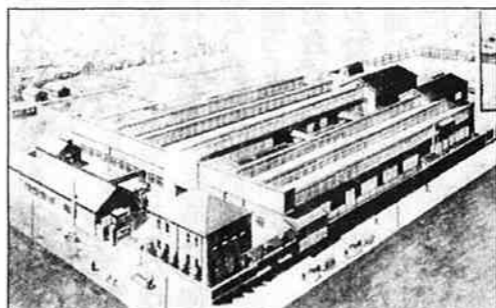
みなさんは「内外編物株式会社」(現社名「株」ナイガイ)という会社名を聞いたことがありませんか。そう、今では靴下から婦人下着、ニット、紳士外衣、子供服まで、最新ファッションの衣料を総合的に取り扱っているアパレル企業です。ところで、この内外編物(株)が戦前、西蒲田三丁目に大きな工場を構えていたことをご存知でしたか。

手許に一九三二年(昭和七)に作成された地図があります。実はこの年の十月一日、従来の東京十五区と、周辺の五郡が二十区となつて合併し、大東京三十五区が誕生しました。その結果、それまで荏原郡に属していたこの蒲田西地区も、蒲田区となつて東京市に編入されることになったのです。

田児童館のすぐ北隣(の一面に内外編物株式会社と記されています。当時は工場の周辺はまだ人家も少なく、田や畑が広がっていたのどかな風景だったであろうことが、この地図からもうかがえます。

内外編物(株)は、一九二〇年(大正九)に、靴下の製造、販売を目的に創設された会社です。それまでの日本では繊維産業は主に家内制手工業が中心でした。アメリカに遊学してその近代的経営と技術を学んだ創業者(依田耕一、小林雅一の両氏)は、名古屋市内に靴下製造会社を設立しました。近代化の流れの中で、それまでの和服に草履、下駄の生活から、洋服に靴という日本人の生活の変化に伴って、靴下は必需品となり、需要は拡大の一途をたどっていきま

事業の発展に伴い、同社は一九二五年(大正十五)九月、当時の東京



蒲田工場

府荏原郡蒲田町大字女塚沖の島八〇一番地に、一六六九坪(約五五〇〇平方メートル)の工場用地を買い入れ、翌二六年四月一日に蒲田工場を開設しました。最初は相生小学校近隣が候補地だったようですが、なかなか許可が下りず、予定地を変更したようです。写真を見ると立派な工場だったことがわかります。一時は本社機能もここに置いていたとのこと。しかし、戦時色が強まってくるにつれて綿糸、人絹、毛糸なども配給統制を受け、民需靴下の生産が難しくなります。代わって軍用靴下を中心に製造を続けていきましたが、一九四五年(昭和二十)四月十四日の空襲で惜しくも蒲田工場は焼失してしまいました。戦後、工場は二度と蒲田に戻ってくることはなく、浜松、大阪、網島(横浜市)などに生産の拠点を移してしまいました。結局蒲田に工場が置かれたのは戦前戦中のわずか二十年間ということになります。その後、工場の跡地は分譲され、今では商店や住宅がびっしり建ち並んでいて、当時の面影を物語るものは何も残ってはいません。

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七十一二一七
(三七三三二) 四七八五

編集後記

第三十二号では、小林の昔や、かつて西蒲田にあった工場をとりあげました。現在は家々が建ち並びこの地域も、かつては、自然がたくさんあったようです。緑も鮮やかで、気持ちの良い季節になりました。昔に思いをはせながら、散歩を試みるのも楽しいかもしれませんね。

わがまちの顔

大田区ハイドン室内管弦楽団

大田区内のいろいろなところで美しい音色を聴かせてくれている大田区ハイドン室内管弦楽団は、当初、大田区内の音楽愛好者の集まりでした。一九八七年に大田区社会教育関係団体として、正式に発足しました。

この楽団は、「室内管弦楽団の堅持」と、「演奏の質、内容の向上」「入場無料で区内で演奏会を行う」「演奏会は地域の

人たちと協働で創造する」「地域の人や、子供の心に音楽の火を灯す」ことを方針とされています。また、「団員の豊か度ゆとりのある人間形成を目的とし併せて地域住民の音楽文化の振興に貢献すること」を第一にうたい、「聴衆と共に歩むこの町のオーケストラ」をモットーに活動されています。

毎年、春と秋に行われる定期演奏会は、今年で四十回目を迎えます。十月三十日には第九の演奏も予定されています。

大田区教育委員会主催の文化祭や社会を明るくする運動「大田区民のつどい」での演奏など

区の行事にも多数協力され、大田区歌の啓蒙、羽田エアポート・コンサートや大田区役所でのロビーコンサート、小学校の音楽教室など、区内の学校や施設の行事へも多く参加しています。

二〇〇三年十月には、大田区、ASCA、共催の「ウィーン・ウィーン・音楽の定期便」では、団員と共演し、以後、毎年ウィーン・フィルハーモニーの団員との演奏会が開かれています。

二〇〇八年七月には「大田区



平成20年度大田区区政功労者表彰式にて

アマチュア音楽祭」に参加し、ドレスデン歌劇場管弦楽団員と共演しました。二〇〇九年七月の同音楽祭では、ロイヤル・コンセルトヘボウ団員との共演でメンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」、シュターミッツのヴァイオリンとピアノのための協奏交響曲他を演奏する予定です。

現在、団員数は約五十五名で、大田区在住、在勤者が過半数を占めている、まさにわが町のオーケストラと言えます。

毎週土曜日の午後六時から九時まで相生小学校の多目的ホールで練習を重ねており、和気あいあいとした家庭的な雰囲気の中で音楽演奏を楽しんでおられます。

一九九四年に相生小学校を母体とした後援会が結成され、現在、会員数は約四百五十名を数えます。「おかげさまで、現在まで無料公演を続けることが出来ており、聴衆の皆様にも喜んでいただいております。」と話されています。

これからも、さまざまな場面で素敵な演奏を聴かせてくださることでしょう。

(取材 柳通委員)

蒲田西特別出張所管内

人口	男	30,027人
	女	27,359人
	計	57,386人
世帯	30,935世帯	

平成21年5月1日現在

特集 『小林の昔』

岩松文書によれば「文永三年（一二二六）小林村は、多摩川の涯へよりてあり、家数わずか二十九軒村内に散住す、東は御園村に隣し、南は原、道塚の二村にさかひ、西は安方村に接し、北は蓮沼村に及びり。東西五町余、南北三町余、水田多くして陸田少なし、当村開墾の年代詳にせず」とありませう。

「検地は元禄年中織田越前守が、うけたまわりしとのみ伝えり、御入国の後は、伊奈半十郎忠治が家にて、世々預り奉れり、検地もありし由、其の時の水張あれども、年曆を伝えず」このような事で明細はなかなかわからないのが現状です。

大田道灌が、江戸に築城して、扇谷上杉氏に属して東国を経略した文明十年（一四六九）二月、小机城を攻めた時に、道灌は蒲田に布陣して、陣中小机城攻めの評定にあたり、狂歌をもつて城を攻めとらんと云い、『小机は細いようでも城である蒲田の鎌で刈りとりやせん』と歌って

います。

その頃蒲田では鎌の製造が盛んであったと云う、多摩川の水害で至る所水たまりが出来て、草が多く生えて、草刈をしなから畑作りや、土地の開墾が行われていたと考えられます。

また岩松文書の中に、「鎌倉期に、河越重弘が、小林郷に往して、小林次郎を名乗り、堀内堀上の地名を残した」とありませうが、これも果たして、大田区小林であったかは説明していません。慶長五年（一六〇〇）徳川家康の命で、小泉太夫吉次が六郷、稲毛、川崎の郷を検地して、本格的な開発が、居住地、水田、用水、と進んでいった事は考えられます。

明治以降の小林

明治二年、廃藩置県によって、武蔵国は、品川県、小菅県、大宮県となり、小林は品川県に属す。

明治二十二年、市町村制の実施により、東京市荏原郡矢口村字小林となる。（旧矢口大字・

蓮沼、今泉、古市場、下丸子、矢口、原、道塚、小林、安方が矢口村となる。）

昭和七年、矢口、蒲田、六郷、羽田の四か町が蒲田区となり、東京市蒲田区小林町となる。（矢口町より分かれ小林町となる。）

昭和十八年、東京都制実施、東京都蒲田区小林町となる。

昭和四十二年住居表示実施、東京都大田区東矢口三丁目、新蒲田二丁目となり現在に至る。

大田区郷土研究・児童文集より

矢口東小学校三年生の子供たちが、昭和十一年頃より昭和十七年頃までの、小林町の長閑な有様を書いた、大田区郷土研究三十号の文集の一部を紹介させていただきます。

『わたしたち、ぼくたちのおじいさんは、東矢口に昭和の初めころから住んでいます。』

わたしたちの学校は、昭和二年十一月一日に開校しました。そのころはまだ、田んぼや畑が多く、ぼくのおじいさんの家でも田んぼや畑の仕事をしています。米や麦、大豆、芋、野菜などを作っていました。

家はかやぶき屋根が多く、農家がほとんどでした。近くには六郷用水が流れていて、農業用水や野菜や

矢口幼稚園の近くは、家が少しで、馬見場と言って、軍隊の馬のえさとなる草がたくさん生えていました。そのころの池上線は、三十分おきにしか走っていませんでした。今のよう

に見えるものも遊ぶものも少なく、祭りのときは、大人も子供もおみこしをかついで楽しみました。べいこま、めんこ、まりつき、おはじき、石けりなどが、子どもの遊びで、外で遊ぶことが多かったそうです。

昭和十七年ころは、まだ家の周りに広場がたくさんありました。道路わきのどぶ川によく落ちてとろんとになりおこられたそうです。

夏になると多摩川大橋に行つて、泳いだり釣りをしたりして遊びました。しじみなどもとれたそうです。

先生が宿直のときは、生徒を集めて小づかい室で、ご飯をたいておかずを作り、先生のお話を聞きながら、いっしょに食べたりしたそうです。夜になると暗い廊下を歩いて、ときようだめしをして、楽しんだそうです。学校の校庭はとてもせまく、プールも体育館もなく、雨の日は体育が出来できなかったのでつまらなかつたそうです。

男の子と女の子は、別々の組で勉強しました。学校給食もなく、家からお母さんの作ってくれたおべんとうを持って行きました。むか

しのお母さんは、たいへんだったと思います。

今とちがつて、テレビはないし、夏になると蚊が出て、かやをつらなければ寝られないなど、生活は不便だったけれど、空き地がいっぱいあって、自然が残っていました。』

本門寺のお会式

六郷橋を渡り御園町と小林町の町境を通つて、本門寺に至る御練街道には、忘れることのない、年に一度の行事がありました。毎年九月に入ると、この街道筋で、お会式の練習が始まるのです。

お会式とは日蓮上人の命日である、十月十三日を中心に行われる法要のことで御命講、または御影講といひます。十二日の御速夜に万灯をかかげて、鉦や太鼓を打ち鳴らして、纏を振りながら、道中を練り歩き、池上の町は深夜まで万灯の灯りとお題目に包まれ、見物する人々で溢れ、大層な賑わいです。

筆者の斜め前にこの講中があつて、九月の初めから、夜になると講の人たちがこの練習に入るので、それは賑やかなことでした。この街道筋に本門寺道駅があり、見物にこの駅を利用する人も多くありましたが、混雑を

避けるために、万灯行列は規制され、車で参道入口付近まで道具を運び、そこからお山に登るようになり、この街道も静かになりました。

目蒲線と池上線

現在東急多摩川線（旧目蒲線）と池上線は寄り添うようにJR蒲田駅にほぼ直角に接続していますが、当時は、目黒蒲田電鉄と池上鉄道の別の会社であったため、目蒲線は、現在の路線に比べて大きく南側へ迂回し、現在の東京実業高等学校の裏を通り、省線の蒲田駅へ平行に接続して行きました。

路線が現在の形になったのは、戦災で焼失した蒲田駅を復旧する際に改良された時からで、この時付替えて廃止された区間には、道塚駅が設置されています。昭和二十一年に廃止されたが、昭和二十一年に廃止されています。道塚駅は、本門寺道駅という名称で、現在東急多摩川線が環八と交差する付近に、仮駅として大正十四年に開業、翌年五月七日に本駅となり、昭和十一年一月一日に廃止時の場所に移動して、道塚駅に改称しました。

この区間も地下鉄の乗り入れのための運転系統の分割で、東

農具の洗い水に使われ、子どもたちは、魚釣り、水泳などをして楽しんでたそうです。大正の終りころ、池上線（大正十一年）が走り出し、目蒲線（大正十二年）が開通して、便利になりました。そこで、関東大震災（大正十二年）で焼け出された人たちが、この辺に土地を求めて移り住む様になりました。住宅がふえていきました。

昭和十一年ころには住宅がふえて、都市化が進んできましたが、まだあちこちに空き地や農園がありました。今、建設の材料置き場になっている所には、矢口市場があり、おばあさんはこゝへ買物に行つたそうです。また、わたしの家の近くには、米屋、ふる桶屋、とこや、炭屋、魚屋、タバコ屋などがありました。物を運ぶには、そのころはリヤカーを使っていました。二階層の家はほとんどなく、木造平屋建ばかりでした。道路の端にはどぶ川があり、雑草が生えていてボウフラがわき、蚊がとんでもなくて、夏はかやをつつて寝たそうです。食用蛙などもぎやかに鳴いていました。大雨や台風ときは、どぶ川の水があふれ、家の中まで水が来て、たたみを上げたり、道路をボートで行つたり来たりしました。池からは金魚が流されて来ました。

急多摩川線となり、伝統的な目蒲の路線名が消えていきました。

八幡神社

（小林若宮八幡神社）



所在 大田区東矢口三丁目二十八番七号

祭神 菅田別命（ほんだわけのみこと）

境内にある小林稲荷神社が古くは祭神であったとのこと。その為か、そこにある手水石は文化十五年寅年（一一八八）三月十五日、小林村民三十二軒有志の寄進によるもの。祭用の力石も置かれている。社殿の回廊の両側の仕切りには、あまり見られない立派な彫刻が刻まれており、一見に値する。

（取材 星野委員）